51. 七日原牧場の狼害

問 次の文書があります。遠刈田山中に狼などいたのでしょうか。

『今月より遠刈田留山中におゐて我妻長五郎大宮甚五郎小野庄兵衛小室市之丞佐藤加平治佐藤留吉大宮三代吉我妻與市郎佐藤圓吉佐藤市太郎佐藤七右衛門同氏周右衛門佐藤久蔵菅野長蔵菅野又右衛門松野徳蔵我妻久作我妻與蔵我妻庄太郎熊猪狼鹿鷲鵰〔もず〕為討候儀無異儀者也　己ノ十月』

答 これは、遠刈田山中において鉄砲を以て狼等を打ち殺してよろしいと、我妻長五郎等19名にさし許された旨の文書であります。発信者名(1)が欠落していますので、正本の写しと思われます。明治の後期まで、本州・四国・九州の山手には勿論、案外人里近い所にも狼(2)が棲息していました。そのため、全国の牧場という牧場は狼の襲来に手を焼いたものでした。この文書の「己〔つちのと〕ノ十月」とある「己」の年は、寛延2年〔1749〕に当ると推定されます。これより先、遠刈田に隣接する七日原(3)に片倉家の牧場が設けられています。8代将軍徳川吉宗(4)の上意を受けた伊達家6代の宗村(5)が、片倉村廉(6)に牧場設置を下命したことに始まります。「七代村廉譜」(「片倉代々記」の内）の寛保3年〔1743〕8月の条に、

『宗村公村廉江御意被成下候ニハ、御国許江牧場取立候ハ、可然旨、将軍吉宗公上意被成下候処、其方領分之内ニ可取立地可有之哉被仰付候ニ付、色々吟味相尽候処、沢内村七日原と申所有之候由申上候えば取立候様御意被成下候』とあり、翌延享元年〔1744〕牧場は一応の整備を見ますが、早速、例外なしに狼害を被むることになります。「七代村廉譜」の延享元年正月十五日の条に、『沢内村七日原狼防のため遠垣結廻し、廻番八手前組之者一夜四人宛、馬方役之者遠刈田江壱人宛、平日為相詰交代申付、……』と記しています。そして、牧場の面積は「八代村典譜」（「片倉代々記」の内）寛政10年〔1798〕4月16日の条に

『七日原牧馬之儀公儀御目付衆へ御書出ニ相成御郡奉行北条大輔留守居之者ニ首尾よって書出す

覚

刈田郡宮村之内不忘山東麓

一　遠刈田七日原　南北一里余

東西一里余

右ハ寛保三年従〔より〕忠山様亡父小十郎村廉ニ牧場取立候様御意被成下野馬父馬共被下置七日原ニ普請仕延享三年〔1746〕より牧場ハ取立于今〔いまに〕制道仕る旨を相達す』とある通りの広大さで、4人宛の不寝番だけで、夜行性の狼の来襲を抑えることは不可能に近い難事でした。そこで、近接地の民間人の協力を求めなければならなかったもののようです。ご来示の文書は、この事にかゝわるものの一つであります。なお、これとは別に、新地の木地屋連中(7)も、狼の防除

を命ぜられていたようであります。

七日原の牧馬は、狼害との絶え間ない戦いの歴史でした。防禦のために山を切り崩し、高さ2m近くの土手を構築し、その上に柵を張りめぐらし、なおも昼夜警備を怠ることができませんでした。そのようにして、営々辛苦、牧場創設70年後の文化11年〔1814〕に、漸く100頭の目標にこぎつけることができました。天明8年〔1788〕幕府巡見使に随行した古川古松軒[8]が、七日原の狼害について「東遊雑記」巻之12に次のように記しています。『十月二日……刈田が嶽の東西の野に、古よりも片倉氏の牧野あり。昔は一年に三百も五百も〔?〕駒を産せし牧なりしに、七、八年以来は山犬[9]数多生じて、牧の駒を取り喰うにより、片倉氏より猟師を遣し、さまざま制せらるれども止まずして、駒の産も大いに減ぜしといえり。』明治に入ると、経営主体が瓦解したため、この七日原は自然消滅してしまいます。その跡地が、時の内務卿松方正義を中心とする松方牧場となります。しかし予期の成績が挙らず、明治25年、早川智寛[10]がその跡を受けて、乳用牛ホルスタインを主とする早川牧場として経営し、昭和4年まで存続しました。その後、特に終戦後開拓入植した人々の努力が実って、今は野菜生産とともに、県内有数の酪農地となっています。

注(1) 片倉家の役職近習鉄砲頭に在る者である筈である。

注(2) 本州・四国・九州に分布していた「ホンドオオカミ」は、明治37年を境に絶滅した。「狼坂〔おいぬざか〕」・「狼欠」・「狼ノ子」（仙台市内）、「狼河原」（泉市内）、「狼巣」・「狼倉」・「狼河原」（本吉町内）、「上狼塚」（中新田町内）、「狼河原」（東和町内）、「狼森〔おいのもり〕」（秋保町）など、小字名などに狼に因むものが数多く残っているのは、狼が人間生活の身近に出没したことの一つの証左といえる。

注(3) 刈田郡蔵王町遠刈田温泉に隣接し、蔵王火山群の南東約10kmに位置した扇状地で、前烏帽子岳東麓を扇頂として東方に開いた勾配7～14度の緩傾斜地である。扇頂から扇端までの距離約3.5km、扇端の幅約3.5km、面積約6km²。標高は、扇頂で約660m、扇端で約370m。火山灰地で、年間6カ月は平均気温10度以下という悪条件である。但し、扇状地であるので、一般的に水利に恵まれ、清冽で豊富な小河川が多い。片倉氏が牧場視察に七日を要したことに、地名七日原の由来があるという。

注(4) 紀州侯徳川光貞の第4子。徳川本家に入り、第8代将軍となる。英明果断、民意を尊重する施策を行った。特に家康の治世を理想とする享保の改革を断行したことは、大きな業績であった。また、米価の安定に努力したので、「米将軍」とも呼ばれる。宝暦元年〔1751〕6月20日逝去、68才、有徳院と諡す。

注(5) p.36注(5)参照。

注(6) かたくらむらかど。初諱は景寛、伊達吉村から偏諱〔一字〕を賜わり村廉と改めた。通称繁九郎、後に勇之助、小十郎と称した。もと松前采女広高の次男で、片倉小十郎村定の養子となり、片倉家第7代の家督を継いだ。夫人昌子は伊達吉村の第8女である。七

日原牧場を創設した。明和５年〔1768〕６月23日歿。

注(7)　「蔵王山麓風物誌」（菅野新一）に『オオカミは……昔、片倉家で経営した蔵王山麓の七日原の牧場に夜な夜な現われて、子馬を襲った。これには牧場の見張番を命じられていた新地の木地屋たちも、なんとも困ったという。なにしろ、夜行性のけものなので、玉が一発しか詰まらない火縄銃では仕留めることができなかった。』とある。これと全くの同文が、「蔵王山麓のけもの」（菅野新一。「白石市史」２の内）に載っている。

注(8)　p. 148注(1)参照。

注(9)　狼をいう。

注(10)　p. 96注(6)参照、p. 388「139. 早川智寛の生年はいつか」をも参照。

資料　片倉代々記（「白石市史」４の内）

畜産業（尾山通男。「宮城県史」10の内）

狩猟（小原　伸。「宮城県史」20の内）

郷土物語白石地方の歴史上巻（阿子島雄二）

蔵王山麓風物誌（菅野新一）

蔵王山麓のけもの（菅野新一。「白石市史」２の内）

東北産業経済史第１巻仙台藩（東北振興会編）

七日原における土地利用の変遷（村山　磐。「奥羽山脈の研究」（宮川善造編）の内）

東遊雑記（古川古松軒）

52. 仙台の医学館と青柳文蔵

問　「東一番丁物語」（柴田量平）の37頁に、次の記事があります。『現在の憲兵隊所在地〔戦前。現中央警察署〕には、元と藩の医学館が建っていた。医学館は、東磐井郡松川村の青柳文蔵(1)（諱は茂明）と云ふ有名な医学者が経営に挙(×)〔與〕って居た。』これは事実でしょうか。

答　元文元年〔1736〕11月１日、北三番丁細横丁西南角に創設された学問所が、宝暦10年〔1760〕北一番丁勾当台通に移され、安永元年〔1772〕７月11日「養賢堂」と称せられ、儒学をはじめ文武の実学も講ぜられ医書の講釈も始められました。更に文化７年〔1810〕学頭に任ぜられた大槻平泉(2)が、学制改革を図り、医学校の分離独立が実現されることになります。文化14年〔1817〕1月、国分町伊勢屋儀兵衛が建築費用を調達上納して、赤井横丁(3)傍の東二番丁に竣工、渡部道可(4)が初代学頭となり、漢方医学の講述のほか、文政５年〔1822〕には、いち早く蘭科も創設して幕末に至りました。これが仙台医学校で、青柳文蔵は全く関与していません。また、文蔵は医学を修